

木俣修の歌と学問

池田富藏

まえがき

木俣修を選んだ理由は、氏が北原白秋の門下として秀れた歌人であると同時に学問的業績を多く持つ学者で、私には身近な存在であったからである。題名を決めたあと日ならずして昭和五十八年四月四日、腎不全のため慶応病院にて死去。享年七十六才。五十七年度の日本芸術院恩賜賞に内定していたのに六月六日の受賞式を待たずして亡くなられたことは歌壇のためにも大きな痛恨事であった。私の執筆対象者はすでにこの世にはいない。しかし氏の遺された業績は永久に消えない。私は歌人にして学究である木俣修の生涯の軌跡を追ってゆきたい。

一、歌人木俣修の軌跡

修の七十六年の生涯を私は六期に分けて、その業績を考えてみたい。

木俣修の歌と学問

(1)第一期(基礎時代・大正7年△12才▽から昭和9年△28才▽まで)

修と文学との出遭いは白秋を抜きにしては考えられない。大正七年(一九一八)十二才の七月に創刊された「赤い鳥」の誌友となり、自由詩、綴方、自由画を投稿。この頃から白秋の推奨を受け文学開眼の機が到来。同十三年(一九二四)十八才には短歌雑誌「日光」が創刊された。自由にして明るい歌人の集合体で、白秋・善曆・千樫・純・夕暮・利玄ら二十余名の歌人が団結した「日光」であった。「アララギ」脱退の純・千樫・逍空などの参加は「アララギ」を刺激させたことは当然であり、当時歌壇における宗匠主義の打破の警鐘ともなった。修は投稿していないが、白秋の諸作品に多く親しむ機を得た。

(-)この期の歌集は「市路の果」で、大正十五年(二〇才)冬から昭和六年(二五才)までの一五二首を収録した二〇才代の前半の歌を抄出した処女歌集。修自身「私の放恣な遍歴時代の所産」とあとがきに記している通り、昭和二年は東京高等師範学校に入学して国文学の学究をめざした時であり、学友にも多くの文学志望者もおり、

当時華やかな築地小劇場に出かけ俳優たちと親しくした青春彷徨時代だった。それでも知を得た歌人には信綱・善麿・迢空・篤二郎・英一・巖・直七郎らがいて恵まれた時代であった。その頃在籍の短歌雑誌は白秋系で、村野次郎主宰の「香蘭」。修は、新抒情主義を標榜、芸術派的行動を實踐した。この歌集のあとがきは、昭和三十四年五月十日病床で記されている（五十三才）。「短歌研究」（昭和三十四年六月号）に綴込歌集として発表されたもので単独の歌集としては出版されていない。次に、歌を少し抄出してみる。

(1)夕づけるたかむらに石を投げてゐるつ明日はわが家に別れてゆかん

(篁)

この歌は昭和二年（二十一才）四月上京して東京高師に復学（前年入学と同時に短期現役兵として京都伏見聯隊に入隊）のため郷里を出る時の作品である。

(2)まなび舎にかへる日は来ぬははそはが包みてくれし餅もてゆかん

(篁)

二首とも素朴な修の若い感傷が詠まれている。

(3)古写本を讀めと責めたる教授のこと夜床にくぐまる時に思ひぬ

(祭のあとさき)

(4)ためらはず地下にくぐりしくたりにおくらん金をひそかに集む

(嵐)

(5)とめどなく思ひまよふか十行に足らぬ履歴を紙にしるして

(北の国)

(3)は学問にかかわる歌、(4)は昭和三年、共産黨員らの大檢舉の中に友人もいた。そのための基金集めで思想同調とは別に友人を助け

ねばならなかった。(5)は東京高師を卒業。仙台の宮城県師範学校赴任の時の歌。すでにここでは二十五才の若い教師であった。仙台に赴任するについては「まよひたるはてに汝が待つ北国に職をもとめて去なんとぞする」という相手の女性が北海道にいた。その人こそ同七月に結婚した志ま子夫人ご本人であった。「市路の果」には、むろんまだ白秋の詩精神享受の影響は見られない。

(2)次は、「みちのく」。本歌集は昭和六年春（二十五才）宮城県師範学校に赴任してから満三年の仙台生活と昭和九年（二十八才）春旧制富山高等学校に転勤してから半年ばかりの間に成った三十二首所収の歌集。これは次に挙げる歌集「高志」におくられて昭和二十二年四月文化書院から刊行された。昭和初頭に県立宮城師範学校から官立旧制富山高等学校に転任することは大変な栄転であった。

(1)春雪のほごろに凍る道の潮流離のうれひしづかにぞ湧く

(みちのくの春)

(2)リラの花卓のうへに匂ふさへ五月はかなし汝に会はずして

(リラの花)

(3)古写本に沁む寒き灯よ眼は閉ちてはろけき字をなげくひととき

(遠流)

(4)つつましく芭蕉を説かす君が瞳の呀えもこそゆけ冬の夜の灯に

(水曜会・小宮豊隆先生)

(5)任もてばいまはいちづに遙けかる高志路を指してゆかんぞ妻よ

(別離・仙台を去る)

(1)の流離の思い、(2)の相聞、(3)は古写本に学問のきびしさを嘆き、(4)には碩学小宮先生の芭蕉講義の情熱、(5)には仙台を去って新しく

富山高校に向う決意など、例歌は少なかったが、「みちのく」には心に沁む歌が多い。殊に仙台にあっては東北大学の文法学者山田孝雄を中心とする国語学会、漱石門下のドイツ文学者小宮豊隆を中心とする水曜会などに修は会員となり活躍した。作歌のみでなく広い学問の世界にいたことは修にとつてはみちのくにおける大きな収穫になったにちがいない。みちのくにを去る淋しさはこうした碩学と別れる寂寥にもつながつたものと思われる。しかし彼は仙台を去り富山に赴任せねばならなかった。それはまた修の新しい学問と芸術の出発でもあった。

(2)第二期(成長時代・昭和10年八29才Vから同20年八39才まで)

昭和十年(二十九才)は白秋の「多磨短歌会」が結成され「多磨」創刊に修は参画。(その他穂積忠・中村正爾・北見志保子ら一六名)白秋は、「多磨綱領」に「浪漫精神の復興」「近代の新幽玄体の樹立」などを掲げた。修は白秋のもとにあり新しい成長期に入ったのである。

(3)歌集「高志」はこの期の所産で、昭和十年春から同十六年(三十五才)七年間の歌六三三首を収録。昭和十七年墨水書房刊。本集は修の第一歌集として多磨叢書第八編として刊行。制作年代からは第三歌集であるが、作者が始めて世に問うた處女歌集である。その歌は「多磨」創刊号に推奨された「雪中の白鷺」七首から始まる。その一部を抄す。

- (1)雪原の真日まひの明あかりに舞ひいでて白鷺の群かがやきにけり
- (2)うち晴るる雪の野に舞ふ白鷺の羽のひかりは天あめにまざれぬ
- (3)鷺の群渡りをへたる野の上はただうすうすに青あざき雪照ゆきあてり

木俣修の歌と学問

仙台から富山に移った第一声。燦々と日の照る雪の上を雪より白い白鷺の一群が渡ってゆく色のない色をモチーフとした美意識は白秋の志向する新幽玄の世界の中に修みずから発見した美の世界が動き出している。

(4)毛の帽の下にかがやく瞳を見ればこの夜発ちゆく兵うらわかし
(雪夜出動)

(5)ワルシヤワを死守せんと言ひて銃執れる女子軍もたちまち壘さんにし
果てぬ
(亡命)

(6)父のみたま和なきてかまさんあかときは母が御詠歌のこゑ徹りつつ
(終焉)

(7)雨雲のなかにこもらふひと峯みねを高天原ときけば恋こほしも
(白杵高千穂)

以上四首は、富山在住中の主な出来事に対する作品抄。(4)は昭和十三年一月の歌。前年勃発の支那事変、(5)は同十四年、第二次世界大戦の歌。(6)は同十五年父の死(68才)に遭った挽歌。(7)は本集掉尾を飾る「日向」七十七首の中の一。白秋は昭和十六年三月久びさの郷土訪問を実現した。白秋は有名な例の「海道東征」を作詩するための日向の旅であり、修は全行程白秋に随行して多くの連作を残したのである。さらに注意すべきは、白秋が本歌集のために序歌を添えていることである。修の父の挽歌から始まり、本集を見ることもなく死去された志ま子夫人への歌「永きあひだなくれとなぐみとりして細り身おもとよく堪へましぬ」や、「さざなみのしがのあがたの師走月うらたのめなく寄りかいまさむ」(四十九日といふに)また、修自身には「天なるや」の長歌、並びに反歌を贈っている。

るが、その詞書きに「修よ、我が病すでに篤し」とあり、歌集「高志」に対しては「この高志を愛しき書、亡き妹がみ命、今見つみ瞻らす書、……」反歌「下敷けかなしき高志の歌巻は清けくいませ妹に会ひつつ」という悲しい本歌集への白秋の序歌は終っているが、以上でもわかるように白秋のこの「高志」に対する力の入れ方、激励は一通りではなかった。不自由な眼に天眼鏡をかざしながら原稿にすべて目を通されている。若い将来ある門弟修へ温い激励の言葉をかけてやったことに著者自身どれほど感激したかは「覚書」につぶさに記している。その「覚書」執筆は「昭和十六年明治節の日」とある。ところが「高志」上梓を前に修は志ま子夫人の急逝（盲腸炎）という人生最大の不幸に遭っている。十六年十二月十四日。行年三十一才。この経過については「追記」の中にくわしく記されており、志ま子夫人は、「高志」の出版を楽しみにしていたが遂にそれを見ることなく亡くなったのである。「高志」と言ふ名を口にする事すらが今は苦しい程である」と記している。修の悲しみは読む人々の胸深く突き刺ってくる。修の亡妻追慕の情は次に挙げる「凍天遠慕」に収録された。

詞歌集「凍天遠慕」は、昭和十六年（三十五才）から同十七年（三十六才）まで「高志」所収の歌以後一年半の作品集で三十四首を収録。妻の亡くなった直前から白秋長逝の期間の歌集ということになる。「凍天遠慕」には「雪天悲傷」と題を附した三九首の挽歌を「寒燈」（吾妻はや・その一）、「うたかた」（吾妻はや・その二）、「悔恨」（吾妻はや・その三）、「眉」（吾妻はや・その四）、「彦根清涼寺」（吾妻はや・その五）と順を追いてそれぞれ五章にわけて収録。

後の方は「花真盛」（白秋先生みとり日記・その一）、「黝き眼鏡」（白秋先生みとり日記・その二）、そのあとの方に「道」（白秋先生追慕・その一）、「晩年」（白秋先生追慕・その二）、「思ひ出」（白秋先生追慕・その三）とこれまたこまかに題をわけて編集している。

本集は「砂囊のかげ」という北陸の暗い風土の歌に始まるが、一卷全体が妻、父、白秋を追憶する挽歌集ともいふべき哀傷深い歌集となっている。著者みずからもその「書後」に「思へば昭和十五年以来の三年、相つづいて父を失ひ、妻を死なせ、先生と永別してしまつた。比較的幸福であつたものの上に、人間としての最大の悲痛事が三つも打ち重なつたのである。本集は、実に妻と先生の死にはさまれた哀傷篇とも言ふべきものである。収めた歌は二百十四首で歌集としては小集に属するが、私にとつては最も記念すべきものである。」と述べている。修の文学を考える上にはこうした悲劇に遭遇した著者を知ることが書も大切であり、彼の悲傷性はここにその根源があることを知るべきである。私自身、この歌集は小篇ながら重要な位置にあることを特に指摘しておきたい。昭和十七年亡妻一周忌、亡父三周忌の法要のさなか、郷里彦根に白秋逝去の電報が届く。あわただしい中に上京。十一月五日の葬儀には門下を代表用辞を捧げた。修にとって幸いなことにこの年、縁あって郷里彦根の前谷善次郎三女しな子様と結婚。修には新しい家庭生活が始まる。

次にこの期の歌少々。

(1)あかときの眼ざめ悲しも虚耳に亡き妻がこゑきくいくたびぞ

(吾妻はや・その一)

(2)縫ひ了へず汝が遺せし色衣のいたいたししかも寒き灯のもと(公)

(3) 写経して悲しきころしづめよとたはやすくいふ人うらめしも

(吾妻はや・その二)

(4) おもひ和ぐ何時の日ならん年わかく死なしめし悔の止むひまもな

(企・その三)

(5) 女おみなのこゑうつくしくたつ夕ゆふまた巷 吾妻のこゑを聴くすべもなし

(企・その四)

(6) 汝なが墓に春蟬のこゑひびくとさうつしみのわがおもひみだるる

(企・その五)

(7) 螢火よほの夜の蘆生あしに息づくを愛しみ言ひし清き面おもはも

(企・その五)

いずれも亡き妻を偲ぶ哀傷歌で、(7)は昭和十七年春、彦根清涼寺の父の墓のかたわらに亡き妻の墓を建てて埋骨。その時、墓石の裏に刻んだ一首である。

(3) 第三期 (自己確立時代・昭和21年△40才▽から同30年△49才▽まで)

この期は、修の四十才代で、昭和十八年白秋の遺託に答えるため富山高等学校を退職し上京した。白秋遺著の整理、編纂のため、四月には白秋遺歌集「牡丹の木」(河出書房刊)、十一月には「白秋研究」(八雲書林刊)などを刊行。この期は文学の問題としては例の桑原武夫の「第二芸術論」(「世界」21年11月号)に於ていちはやく日本の文学伝統を否定しようとする態度であり、俳句・短歌を第二芸術として位置づけた。こうした時に修は「多磨」(21年11月号)に「自戒」と題する一文を草した。これは歌人木俣修が人間的立場からの作歌方法論宣言で、注意すべきものであった。「文学の

場に出て短歌をして今日の文学として生きる道を見つけようとするための苦しみは生やさしいものではない。然し、われわれは今、矢の尽きるまでこのことを行はなければならぬ。(中略) 白秋の文学への処し方のはげしさといふものは今私にかうした受け取り方によって生かされようとしてゐる。そして私はこれこそ今日のわれわれのもっとも大切な根本的な問題であると信ずる」とあり、その気魄は極めて熾烈で、白秋文学継承における今日的作歌態度の宣言であった。また歌壇一般の公器として短歌総合雑誌「八雲」(八雲書店刊・21年12月)が発行され、編集久保田正文、顧問木俣修。創刊号編集後記に「低俗頹廢の歌壇現実に対して真に正しい方向を指すアンチ・テーゼたらしむる」とあり。戦後歌壇を新しく確立してゆく所にその目的があり、歌人のみでなく広く文芸評論家、学者、作家などを動員して評論や座談会を実施して歌壇革新のための役割を果たした。本誌は二十三年三月廃刊、そのあとを継承したのが短歌雑誌「短歌新潮」で六月創刊。修は編集者となり、「八雲」時代を継ぐ。季刊誌で二十三年十一月三号で休刊となった。この年七月、修は歌集「冬曆」(八雲書店)を刊行した。

(四) 歌集「冬曆」は、昭和二十二年の秋から二十三年の夏まで僅か十ヶ月の歌四三三首を収録。歌集「流砂」につぐ戦後第二の歌集。四十代の創作である。「巻後小記」に「この期間に私は新しい日本の生きるもの一人として自らに対してきびしい自己批判をつづけて来た。(中略) きびしい現実との対決なくして歌を生かしてゆく道はもうないだろう。そしてその対決にまで自らを駆りたててゆくべき主体の確立なくして歌人といふものもう成りたないであらう。行

路はいよいよ嶮岨である」とこれまでの反省にたち現実との対決、主体の確立以外にこれからの歌人の在り方はないと結論づけた。そういう時の歌集「冬曆」は日本文化の伝統性が種々批判されてきた戦後歌壇の反省期に立つての歌集であった。

(1) 片隅の古典のうへにたまりたる塵を吹きなどしつづつ冬の日

(冬曆)

(2) 壁面の古地図をはがすけふのおもひ寒むぎむとしてなになにつな

がる

(けふのおもひ)

(3) 生終へし蜻蛉の翅はひかりつつ落葉のうへにいく日保たん

(全)

(1)・(2)には学究者修の姿、(3)においては蜻蛉の死にさえ人間の運命のはかなさと重なり合つて想うのである。末期の「多曆」を守り、「八雲」「短歌新潮」などにより歌壇に活躍し、第二芸術論に対しては歌人の実作により応えるほかはなかった。修はそれを敢行した。すでに白秋の師風を脱し、新しい人間のロマン主義を樹立しようとして戦後の短歌を広い文学の場に押し出そうとした意欲がそこにあった。故福田采一は「木俣は戦後派ではなかったが、短歌の戦後を演出した一人であった」(「現代の秀歌」と評した言葉はこの頃の木俣の本質をよく把握した表現として印象的であった。四十才代における歌集としては第七歌集「落葉の章」(昭和22年秋八才Vから25年八才Vまで)第八歌集「歯車」(昭和26年八才Vから28年八才Vまで)などがある。「落葉の章」は長子高志死去という悲しみに遭い、その挽歌集ともいべきもので、「歯車」の時代も前集に続く悲しみの歌と旅行詠が多い。

(1) 罪びとのごとくに坐して妻とふたり秋夜の骨を守らんとする

(落葉の章・百日)

(2) 笑ふこともなく過ぎたる百日ぞと寒き朝明の香を点ずる (同)

(3) 昨日の夜もこよひもいねずいやはての母のいのちを目守りつぎつ

(歯車・信濃悲歌)

(4) 志摩の津の海士が悲願に生れまして潮のなかにいますみほとけ

(同・潮仏)

のような歌が続く。この期には歌集のみでなく学術書も多く刊行した。その主要なものを年代順にあげると「岩波文庫・北原白秋歌集」(昭24・8)「近代短歌辞典」(新興出版社・共編・昭25・7)「近代短歌」(久松潜一共著・至文堂・昭26・2)「邪宗門」(雲母集)(創元社文庫・昭27・2)「白秋歌集」(新潮社文庫・昭27・5)「角川文庫・木俣修歌集」(解説・久保田正文・昭28・6)「新注・近代短歌」(小泉三共編・白楊社・29・4)その他多いが省畧。

さてこの期には昭和二十八年(四十七才)五月に「形成社」を結び、機関雑誌「形成」を創刊したことは歌人として木俣修がこれまで長く白秋に従いながら新しい時代にいたり、修自身の人間主義短歌を志向した事を意味する。以後「形成」は木俣修主宰を中心に歯車の如く動き始める。ここで彼の歌論について述べておきたい。「形成」の創刊号に「われわれは今日のこの荒寥とした生活の中におけるもろもろの苦悶、懊悩、歓喜、矛盾を歌はなければならぬ。人間が、その置かれてゐる環境の中で、どのように生き、何を要望し、何に苦しんでゐるかを歌はなければならない」とその作歌

信条を力強く訴えている。信条というよりむしろそれは新結社創設にあたっての彼の信念といふべきであった。これは、歌集「流砂」の書後にも引用されている。「多磨」解散（昭27・12）からついで「形成」創刊と歌壇もあわだしく修自身も忙しく人間主義の短歌を高揚していった。この頃の文章を少し拾ってみよう。

(1) われわれはデカダンスの中に突入し、デカダンスを通過することによって、デカダンスを克服しなければならぬ。そして克服のかなたにつねに新しい人間の創造、新しい社会の形成が展望されなければならない。そこには作家の人間性の中に強力な倫理と思想が要請される。（「短集と肉体」——「詩歌殿」昭23・9）（42才）

(2) 短歌は作者自身の生活を離れては成り立たない文学である。（中略）「自分の生活」の探究の中から生れて来る短歌が、ほんものであり、つねに新しい光をもっているものである。今日に生きているわれわれ一人の人間のいのちの真実を生々と伝えてさえいれば、それは立派に今日の文学として通用するものである。「働く人の短歌」——「働く人」昭和25・12）（44才）

(3) 古風な咏嘆性から脱出しようとする努力の中から生れた新しい咏嘆が、今後も歌壇に新しいものを提示してゆくのではなからうかと思ひます。（咏嘆の問題）——「短歌研究」昭26・12）（45才）

以上は雑誌などに発表されたもので、(1)新しい人間の創造、(2)人間の真実、(3)新しい咏嘆などの具体的問題の中からこれからの歌を考へようとする修の作歌の構えが見え、これらは次期昭和三十一年四月刊行の歌論集「人間と短歌」(新典書房刊)に結集されてゆく。

(4) 第四期（自己拡充時代・昭和31年八50才Vから同40年八59才Vまで）

この期は修の五十才代で、歌集としては「天に群星」（昭33・10月・四季書房）「呼べば哥」（昭39・10月・牧羊社）、の二集を刊行している。

内歌集「天に群星」は、昭和廿九年から卅一年に至る三年間の歌五九八首を収録。その「小記」には「私の戦後作品は『冬曆』『落葉の章』『鹵車』を経てこの作品集に至るわけであるが、その間における文学態度は毫末も変るところはない。人間的な精神をかりたてられるところに、また人間的な欲求を感じるところに私はつねに鮮烈な作歌衝動を覚えてきた」と記している。このように人間主義に立脚した作歌態度をくり返していることがその特色である。作品としてはこれまで内にももっていた憂情から抜け出して外に向い能動的に詠む姿勢が目立つ。昭和三十一年八月、第四回「形成」全国大会を九州筑後柳川で開催。修は原爆記念日の八月九日に長崎に行き、その夜浦上天主堂弥撒の歌を作っている。

(1) 天に 群星 草生に 虫のこゑみつる 夜のいのり 八万のたまに ささげ
て
（浦上天主堂にて）

(2) 寝不足にひと生おくらむさだめとも埃を吹けり夜の凡に
（幼き胸）

(1) 天空に群星の平和なきらめき、地上にも限りない平安を祈る作者。(2)には学者の孤独な姿が見える。

(内)歌集「呼べば哥」は、昭和三十一年から三十七年に至る一〇四三首を収録。修の歌集としては最も歌数が多い。

(1) 幼くて仏となりし子をおもふいよいよよもろき老のところに

(十三回忌)

(2) つまづきをくりかへし来しおろかなるいく十年ゆゑにわがひと生なま愛あなし (ゆく春)

(1) は亡き子を偲ぶ歌。(2) は生きる人間の愛しい性の歌。秀れた旅行詠も多いが今は紙数の関係ですべて省略せざるを得ない。久保田正文氏はこの「天に群星」頃の修の歌は「書齋的メラニコリア」をよく代表しており、インテリゲンチヤらしい抒情と嘆きがあり、同時に緊張した文学的生活がうまく反映し合っていると述べている。「短歌現代」五八・七月号・短歌散歩)のは私も同感である。この期における修の主な仕事は歌集のほか、(1)「和歌文学大辞典」(共編・三七・一〇月・明治書院)、(2)「昭和短歌史」(三九・一〇月・明治書院)、(3)「近代短歌の史的展開」(四〇・五月・明治書院)などあり、殊に(2)は昭和女子大学より第一回学術賞をうけた大著である。(この書については後述する)。

(5) 第五期 (円熟時代・昭和41年△60才▽から同50年△69才▽まで)

この期は修の六十才代で、老の意識を踏まえながら、なお多くの仕事に向って日々新しい希望に生きようとした時である。歌集としては「去年今年」と「愛染無限」の二冊を刊行。

(6) 歌集「去年今年」は、昭和三十七年(56才)から四十年(59才)に至る七二三首を収録。短歌研究社刊。

(1) 夜に戯れる原稿持ちて寝しづまる道をゆくポストのあるところまで (篋の空)

(2) 六十歳のわが靴先にしろがねの霜柱散る凛々として散る

(冬至あとさき)

(3) あるときは檻に飼はるるものごと仕事にこもるいのちさびしく (昭和短歌史成らんとして)

(4) 狼藉の凡の上に見あたらぬ缺をさがす今日も夜ふけて (文獻のかげに)

これらの歌の中には老いに向う学問のさびしさ、同じ学問の道を歩く私にとってはどの歌も心に沁み通る。(4)の歌などはほほえましい情景で、私などいつも経験するところである。私が木俣修の歌に関心を持ち始めたのも作品に悲傷性を持っていることや、こうした学究生活の素材を多く歌にし、それが表面的に終らず、凡て作者自信の人間のさびしさがしみじみと詠みこまれ、そこに親近感を覚えたからである。「去年今年」につづいて歌集「愛染無限」を刊行。

(6) 歌集「愛染無限」は、十二冊目の歌集で昭和四十年(59才)から四十四年(63才)三月まで約四年間の歌九七〇首を収録。昭和四十九年六月明治書院刊。だんだんと老の意識を持ちながら更に歌境は深く沈潜してゆく。「愛染」ということは修自身の言葉では「煩惱」の意味を持っているという。老境に入ってもいよいよ煩惱の中に身をさらすことが多く、澄明な境には入れない。生きている限り続く煩惱であるから「無限」とつけ加えたともいう。著者の偽らざる心境であろう。老いてなおヒューマニズムの世界に煩惱の身を置く生き方の深さを思う。

(1) 愛染のくるしみもてる老人ひとり黒き外套に身をつつみゆく
この歌は、生前親しかった吉井勇の墓地を青山におとすれた時の

一首で、この老人は勇の姿の幻影であると同時に又作者自身の姿でもある。昭和三十二年七月、修六十二才の時の歌。

(2)七十二歳の吉井勇ののぼりたる峠にわれもけふはのぼり来つ

明治41年、勇が白秋、李太郎らと共に興した「パンの会」は文壇における耽美主義の原流となった。時代こそ違え、修にも同じ文学系譜としてその血脈は継承され生きている。昭和三十八年(57才)十月に「吉井勇全集」(番町書房)、続いて四十年に「吉井勇・人と作品」(明治書院)を刊行した理由も十分に了解出来る。

(2)さかんなるいのちならねば午前一時を限りとなしてつづくよ 几より立つ
(さかんなるいのちならねば)

(3)なほ十年わが身おおくべく新しき研究室の鍵を手にしつ

(新しき鍵)

(4)怒りつつしごとなしきぬ老いづきて怒らざる日となりて思へば

(寒緊る)

など例を挙げると切りながいが、老いながら学問に執した労苦を歌った作品は依然として続く。この昭和四十二年(61才)六月には「昭和短歌史」ならびにその他の近代文学研究の業績により文学博士の学位を受けた。(国学院大学)七月、NHKテレビにて「近代の歌人たち八晶子・節・牧水」を放送。八月には歌論・随筆集「短歌回向」(海燕社)を刊行。十一月には実践女子大学文学部教授となる。(昭和二十六年以来教壇に立った昭和女子大学にはなお講師としてとどまる)。

この期における主要な仕事については、四十三年五月に、「現代日本文学大年表」(明治篇・共編・明治書院)、四十六年(65才)

四月には「評論・明治大正の歌人たち」(明治書院)、七月には自選歌集「故園の霜」(短歌新聞社)、十月には「大正短歌史」(明治書院)、四十八年九月には「木俣修歌集」(彌生書房)を刊行。十一月には長年の芸術活動と文学研究に対して紫綬褒章が受章された。ついで四十九年には前年刊行「木俣修歌集」により芸術選奨文部大臣賞を受賞。以上の如く、第五期の六十才代は、歌集のほか、文学研究の多くの労作を書き、老いて益々旺盛に活動し、まさに円熟の境地に立ち至ったのである。

(6)第六期(完成時代・昭和51年△70才▽から同58年△終焉・76才▽まで)

この期は修の最晩年七十才から七十六才で亡くなるまでの完成時代である。歌集には「雪前雪後」がある。

(+)歌集「雪前雪後」は、この世最後の遺歌集となった第十四冊目の歌集である。昭和四十六年(65才)から四十九年(68才)までの歌七五四首を収録。昭和五十六年七月短歌新聞社刊。この期間には作者に大患入院ということが起り、この歌集の底には生命の危機感の揺曳があり、この集の特色ともなっている。この歌集には、(1)「峽に生くる人々」、(2)「普問品」、(3)「炎暑病棟」、(4)雪明の題にわかれ、それぞれに多くの小題を持って整然と編集されている。
(1)わが生ののこりの時間を刻むがにこよ戸をうつ春の時雨は
(2)急速度に深みゆく老か病める身の手も足も秋をいち早く冷ゆ
(3)老の悲哀あたらしくまたかきたて夜の手焔に交ゆる燧の火
(4)寝んとして外す入歯は怪のものがたましひもたぬ 銀ひかる
(5)書冊の上の白き微塵に眼は凝れど一切空のおもひ募り来

こうした作品を見るといづれも老いの深まる寂寥がただようてくる。ことに、(3)には手焙の燵の火によつてゐる作者の老いの姿がそのまま見えて心に沁みる。吉野鉦二氏はこの「雪前雪後」は「清澄な老境の極致美」と指摘したが（「短歌」二月号）、まさしくその通りと思う。以上は修の全歌集を資料としたが紙幅の関係上、抄出例歌は最小限度にとどめた。ついでには私など「形成」外の者にとつて、木俣修の最後の遺詠ともなつたのは「短歌現代」五十八年四月号巻頭歌「春寒抄」二十三首であつた。少し引用しておこう。

- (1) 浩瀚の辞書のたぐひもすでにしてわれに用なきものとなりたり
 - (2) 教へ子も古稀の仲間に加りぬ急がずに歩めといひてやりたり
 - (3) 老涙はとめどもあらず病めばとて人死せばとて流るるものゝを
 - (4) 見たきものも読みたきものもなき夜の長夜をかこつ幾夜ならむなごよ
 - (5) いち早く新しきものにとりつきし若かりし日の恋しきろかも
- (1)、(2)、(4)には人生を走り続けた修の澄み切つた心境がある。生前よく歌、学問の道を修はマラソン競走にたとえて人びとに話した。修自身こそ生涯休まずマラソンを走り続け、大きな業績をこの世に残したその人であつた。老いて益々多忙。この期においては昭和五十一年（70才）二月には文部省視学委員（文学）、四月には「昭和萬葉集」（講談社刊）の編集委員（選考）になる。五十二年十月「日本近代文学大事典」全六巻を刊行（講談社）。五十三年四月、隨筆集「途上の虹」（求龍堂）、五十四年春の叙勲にて勲三等瑞宝章を受け、官中歌会始選者なども続け、五十六年には「与謝野晶子全集」全二十巻（講談社）を完結させた。五十八年三月二日には、五十七年度の日本芸術院恩賜賞に内定し、その受賞式も六月六日であつた。

つたのに遂に命は待つてくれず四月四日早朝、腎不全のため七十六才の生涯を閉じた。歌人、学者として多くの著述を残し、先述の通り最期まで息長くマラソンをまっしぐらに走り続けた人であつた。「和歌文学会」（学会名）で幾度か私はお目にかつたこともあるが、再びはもう会えない。告別式は六日。木俣家菩提寺、世田谷の豪徳寺で執行。法名「慈嚴院殿歌道良修居士」。喪主は妻しな子さまであつた。今はひたすら輝かしい多くの功績を残された木俣修氏のご冥福を祈るばかりである。

二、木俣修の学術書

学術者としての木俣修の著述書も極めて多く膨大な数にのぼるが、これをぐつとしぼると(1)「昭和短歌史」と(2)「大正短歌史」(3)評論明治大正の歌人たち」であろう。以下これらの著作について考えてみたい。

(1) 昭和短歌史

修は「昭和短歌史」の「はしがき」に「日中事変・太平洋戦争と長い歳月にわたる戦争によつて人間の精神はふみにじられ、そのことによつて真の意味の文学は全く息の根をとめられてしまふというような事態にたち至つたのであつたが戦争の終結によつて、ようやく人間の自由は恢復され、人間的な精神を精神として生きることのよるこびを味わうことができるようになった。そして人間の文学は徐々に息を吹きかえしはじめたのであつた」と書き始めており、歌人としての修については(一)においてつぶさに述べた如く人間主義の立場で作歌をしてきた。実作もそうだし、歌論も、研究も同じ態

度で近代短歌の歴史も新しい視点から執筆しようとして「昭和短歌史」を書きつがれ、昭和三十九年十月（58才）に刊行した。（明治書院）本稿は昭和三十三年一月から三十七年十一月にかけて「短歌研究」に連載されたものである。実はわかれわかれポトナム主宰の先師小泉冬三はすでに「近代短歌史」（明治篇）を三十年六月に白楊社から刊行している頃で、これは小泉冬三の卓越した名著であり、そのことを修も聞いていたし、明治時代からは起筆せずに逆年順にまず「昭和短歌史」を思い立ったのである。（小泉冬三の労作「明治大正短歌史料大成」（全三巻・立命館出版部）は膨大な資料を基にして成った名著で、私など昭和初頭まだ学生の頃に先生が苦勞されていたか今でもその姿が想い出される）小泉冬三は近代短歌史研究の草分けであり、木俣修はまた新しい視点から近代短歌の研究に力を注いでいった。本書の章立は、第一章を大正十五年から始め、第二章「既成歌壇に挑むもの」、第三章「新興短歌の諸問題」（昭和三年から五年にかけて）、第四章「伝統短歌の様相」（昭和五年ごろ）、第五章「昭和六年から十年まで」（満洲事変前後）、第六章「昭和十年代前期」（事変と歌人の覚悟）、第七章「昭和十年代後期」（太平洋戦争の開始・大東亜戦争歌集）、第八章「昭和二十年敗戦の前後」（民主主義文学の発足）、第九章「昭和二十一年」（第二芸術論）、第十章「短歌否定論と歌人たちの動き」（否定論の展開）、第十一章「戦後の作品と歌集」（中堅歌人および戦後派歌人の歌集）以上の構成を持ち、昭和二十五年の朝鮮戦争勃発までを以て「戦後文学」の区切りとする方法により「昭和短歌史」もここを一応の終結とみているのが本書の短歌史編の特色をなして

いる。編年体の方法により修はその膨大な資料の整備と分類を施し、学問的に客観的態度を以てこの大著を完成させたのである。今後の短歌史研究の労作としてその位置は重い。巻末に「昭和短歌史年表」と「人名索引」を付しているのは今後の研究者のため極めて有益である。

(2) 大正短歌史

本書は、「昭和短歌史」の姉妹篇ともいふべきもので、もともと雑誌「短歌研究」に昭和四十一年一月から四十五年八月まで連載した論文を一本に集成し、昭和四十七年十一月、明治書院から刊行した単行本である。本書の構成は五章に分かれ、第一章は大正前期（「明星」の終焉から明治四十四年まで）第二章は大正前期（大正元年から同七年まで）、第三章は大正中期（大正七・八年のアララギの動向）第四章は大正後期（大正十年から同十五年まで・アララギ対日光の問題）、第五章は大正の終焉（赤彦独裁・茂吉十四年帰朝）というように本書に於ても(1)と同じく編年体の方法を以て大正期を五期に分けて考察している。大正期の歌壇の主流は「アララギ」であることは明らかであるが、始めの数年間には明治末期における歌人たちの活動がそのまま持続され、そこから大正期の歌壇も動き出しており、本書でまず、第一章に「大正前史」として「明星」から「自然主義」「アララギ」など結社と雑誌の興亡などの資料を十分に活用して大正短歌史の特色をつぶさに分析している。近代短歌史に類した著書に「近代短歌史の史的展開」（昭和四十・五・明治書院）があり、概説的ではあるが、近代短歌の歴史的展開を、明治期、大正期、昭和期の政治史的に三つの区分に分けて各時期の短歌

の特質を明らかにする方法をとり極めてわかり易く、作品例を豊かにあげ歌論の実態を明示して、巻末に「近代短歌史年表」、「索引」を付しているのも便利である。なお他にも近代短歌についての著作は多いが、修にとつては早くから「近代短歌史三部作」の構想もあり、「昭和短歌史」「大正短歌史」が刊行された時点において最後の「明治短歌史」に取りかかったのは昭和五十二年七月(71才)から「短歌現代」に連載を始めたが残念ながら一本にならなかった。余りにも多忙すぎたのである。

(3) 評論・明治大正の歌人たち

本書は、昭和四十六年四月(65才) 明治書院から刊行された。歌人研究書として秀れた著述である。著者はこれまで以上述べてきた「短歌史」関係のほか、「歌人作家論」も多く執筆している。本書は、作家論としての代表著作といつてよい。本書の構想としては(一)序説としてまず、「近代文学と短歌」を草し、明治以降現代短歌に至る時代背景について論じ、(二)は十五名の各作家論(三)は小説家の短歌(四)は歌人明治天皇のことによつて終章としている。ここで取りあげた歌人は、佐佐木信綱・与謝野晶子・石川啄木・北原白秋・吉井勇・斎藤茂吉・中村憲吉・土屋文明・釈道空・今井邦子・若山牧水・前田夕暮・窪田空穂・土岐善磨・太田水穂らである。いずれの作家を論ずるにしても、その背景となる結社の問題、或いは個人の作風、伝記、当時の歌壇事情など多く近代短歌史にかかわる問題もあり、それは著者修の該博な秀れた研究から湧きいずるものであった。特に興味を覚えたのは小説家芥川龍之介(柳川隆之介時代の短歌)の短歌が白秋の「桐の花」を模倣し、やがて

斎藤茂吉の「赤光」に親しみ、大正三年五月号「心の花」に柳川隆之介の名で歌を発表しているなど芥川龍之介の歌人紹介として面白く読んだ。「愛恋無限」や「天の夕顔」の名品を生んだ中河与一の歌集「光る波」(大正十一年四月刊)の歌は「ザムボア」(同年一月刊)に朝江彩介という筆名で「京の街」を発表している。(二十一才の早稲田大学予科に入学する前年)歌集「光る波」は、昭和九年五月「秘帖」という名で書物展望社から再刊された。その中の「相聞」、「貧しき家」などの名作を修は紹介してくれた。中河の小説の浪漫的抒情性について修が「それは小説家中河氏と歌人中河氏がその時点において、一つの統合をどけて、静かにして崇高な一大交響楽を奏でた」と記しているのは印象的であった。以上のほかに修の学術書はその数も多いが、紙副の關係でこれにとどめる。彼が秀れた歌人であるばかりでなく、一方に於て有能な学者、大学教授、教育者であったことを私は尊敬している。学者としての木俣修の業績はここで私が多く語るなくても具眼の士がよく知る所である。歌人の業績を中心に以上その軌跡を私なりに六期にわけてまとめてみた。これは私自身の考えた木俣修像の生成発展の区切りである。

参 考 文 献

(1) 単 行 本

○近代短歌史八明治篇(昭和三〇・六月・小泉冬三・白楊社) ○昭和短歌史(昭和三九・一〇月・木俣修・明治書院) ○近代短歌の史的展開(昭和四〇・五月・木俣修・明治書院) ○評論・明治大正の歌人たち(昭和四六・四月・木俣修・明治書院) ○大正短歌史(昭和四七・一月・木俣修・明治書院) ○木俣修歌集(昭和四八・九

・木俣修・彌生書房 ○木俣修の秀歌（昭和五四・一二月・吉野昌夫）○歌集雪前雪後（昭和五六・七月・木俣修）○故園の霜自註（昭和五七・七月・木俣修）その他。

(2) 雑誌

○「短歌」（昭和五七・一月号）○「短歌」（特集・木俣集・昭五七・二月号）○「短歌現代」（昭五八・四月号）○「短歌」（昭五八・六月号）○「短歌研究」（昭五八・六月号・木俣修追悼特集）○「短歌現代」（和五八・七月号・木俣修追悼号）その他。